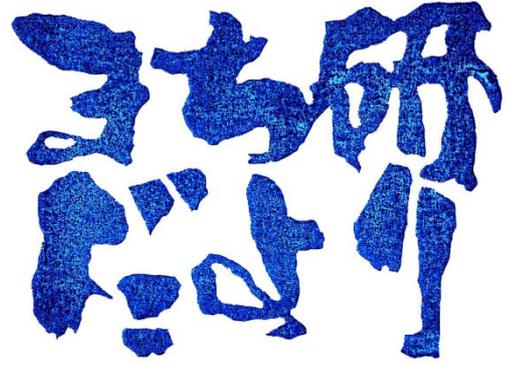


阿波のまちなみ研究会報



2022年9月号

vol.339

- 第46回太鼓楼見聞録2~3
- 特別寄稿 父の建築史34~5
- 大本瑞雲郷別院「碧庵」調査報告書(第1回)
.....6~8
- 事務局通信8

阿波のまちなみ研究会

〒770-0931 徳島市富田浜2-10 (公社)徳島県建築士会

phone : 088-653-7570 fax : 088-624-1710

太鼓楼見聞録 (46)

飯田市旧伊豆木陣屋太鼓楼(現専照寺鐘樓門) 1
谷中 俊裕 (阿南高専)

1. はじめに

今回と次回にかけても寺院に移築された近世城郭の旧太鼓楼遺構を紹介したい。ただし、厳密には、太鼓楼ではなく太鼓楼である。移築後は、伊予小松陣屋や伊勢神戸城の太鼓楼同様、上層に乗るのは太鼓ではなく鐘に替えられている。やはり、多くの寺院にとっては、太鼓より鐘の方が優先されるのだろう。

太鼓楼があった飯田市の伊豆木陣屋は、「旧小笠原家書院」としての方が通りがよい。万石未満ながら、参勤交代を行う格式の高い大身旗本(「交替寄合」)の現存陣屋として極めて貴重なものである。筆者は、今年9月、30余年ぶりに伊豆木陣屋とその太鼓楼を鐘樓門として引き継いでいる飯田城下の専照寺を再訪し、両所で多くの新しい情報を得た。そのため連載2回分の記事となってしまうが、今回はまず伊豆木陣屋そのものを中心に紹介する。



写真1: 飯田市旧伊豆木陣屋鐘樓門
(現同市伝馬町専照寺鐘樓門)

2. 伊豆木の地理と歴史

伊豆木地区は、伊那谷南部の飯田市の最南部近く、天竜川西岸の、比高100mにも及ぶ高い段丘上に小丘陵が連続する地域である。(緯度的には天竜峡のちょうど西側付近。)伊豆木陣屋は、段丘上の比高80m程度の小山塊の南麓に立地する。陣屋敷地の南辺には、天然の堀のように兄川が流れ、東方の弟(おと)川を経て最終的に天竜川に注ぐ。背後の小山塊には、中世には土豪の伊豆木氏が拠ったと推定される伊豆木城があった。谷筋を利用した空堀に囲まれた郭群がよく残る。近世の伊豆木陣屋は、伊豆木城の根小屋の跡地



写真2: 伊豆木陣屋書院と背後の伊豆木城跡

と推定される。陣屋の南麓には、小規模ながら城下町(陣屋町)が形成されていた。(文献1)東麓の小笠原家

菩提寺の興徳寺も出丸的な位置を占めているように見える。

中世の信濃では、様々な家系の武将が守護を務めたが、最も多くの名を連ねたのは小笠原氏である。しかし、多くの国のような圧倒的な地位を占める守護所は存在しなかった。(文献2)小笠原氏も、室町・戦国期には府中系(松本市井上館、林城、深志城[現在の松本城])、松尾系(飯田市松尾城、鈴岡城[この2系統でも抗争])で対立し、守護職や惣領家を争っていた。この混乱状況は武田氏の信濃侵攻の大きな一因である。府中小笠原氏は、上杉氏、三好氏を頼った後、織田氏の麾下を経て、徳川政権の譜代大名として豊前小倉藩主となる。松尾小笠原氏は、一旦武田氏の支配下に入ったが、やはり徳川譜代の臣として最終的に越前勝山藩主として続いた。(文献3)

近世伊豆木の初代領主小笠原長巨(ながなお)は、最後の松尾城主で武蔵本庄藩主となった小笠原信嶺の弟で、慶長6年(1601)1000石で伊豆木に封じられた。(文献4 p. 3)中世の伊豆木城に拠ったと推定される伊豆木氏は、松尾小笠原氏の配下で、小笠原姓を併記している文書も伝わる。(文献5 p. 142)どの程度の親族かは不明だが、一門の故地に居を構えた長巨の感慨もひとしおだっただろう。伊豆木城(の根小屋か)には、伊豆木氏の後も松尾小笠原氏の旧臣西村氏が居住し、守備のかたわら農業を営んでいた。長巨は、西村氏から伊豆木城の屋敷を明け渡され(文献4 p. 4)、近世陣屋として整備する。交替寄合の伊豆木小笠原氏は11代長裕(ながかた)で明治維新を迎えた。

3. 伊豆木陣屋の詳細

近世陣屋としての伊豆木陣屋の整備は、小笠原長巨の入封の直後に始まったと推定されるが、完成には相当の年月がかかったと思われる。現存書院の床



写真3: 伊豆木城の郭間の空堀



写真4: 同頂部郭の櫓台か狼煙台



写真5: 同東麓の興徳寺



下に「寛永」の墨書がある。(文献 6 p.12)

陣屋の諸建築のほとんどは、明治 5 年 (1872) 取り壊されたが、旧状は、地元の戸長から提出された詳細な絵図で知ることができる。(図 1 文献 7)

現地に現在残るのは、懸造の書院(図 1 ④)と書院西方の宝蔵(図 1 ⑨)のみである。注目すべきは書院で、桁行七間梁間六間平屋、妻入母屋柿葺、床下は、平側一間半が石垣基壇より張り出し舞台柱で支えられている。(写真 6) 間取りは、床が一間半だけ張出す食違い四間取りで、北以外の三方に廊下が巡る。(写真 7) 正面(東面)妻側には、柿葺唐破風の玄関が違和感なく付いているが、これは陣屋取り壊し時に御用所(図 1 ③)の玄関を移設し

- ① 御門 (伝馬町専照寺の山門として移築) ○
- ② 物見櫓 (市内個人宅茶室として移築) □
- ③ 御用所 (間口六間×奥行十三間、平屋柿葺)
- ④ 書院 (間口六間×奥行七間、平屋柿葺、現存)
- ⑤ 御居間・⑥ 御用部屋 (間口三間×奥行八間、平屋)
- ⑦ 文中部屋
- ⑧ 御料理処 (間口六間×奥行二間)
- ⑨ 御宝蔵 (二間×二間半、現存)
- ⑩ 茶室 (九尺四方、外に三疊敷の控室が付属)
- ⑪ 御西 (四間×六間、二階建)
- ⑫ 御土蔵
- ⑬ 御守殿 (二間×三間、茅葺)
- ⑭ 米蔵 (二間×六間、平屋)
- ⑮ 御殿屋 (四間×十間)
- ⑯ 矢場
- ⑰ 米蔵 (三間半×五間)

図 1: 明治 5 年伊豆木陣屋の構え (現地解説板)



上 写真 6: 伊豆木陣屋書院 懸造部分
下 写真 7: 同南一の間、二の間と廊下

たものである。この位置には、もともと御用所との接続部である「取次の間」があった。(文献 4 p.4) また、移築された太鼓門の代りに、玄関前に薬医門形式の表門を新設した。なお、書院には帰農した領主家が住み続けたが、1952 年国の重文に指定、1964 年には領主家から飯田市の管理下に移管、1969 年には半解体の大修理が完成し、一般公開が始まった。

陣屋外に移築された建物としては、太鼓門(図 1 ①御門)と物見櫓(図 1 ②)がある。これらの陣屋での建ち位置の現状は写真 8、9 の通りである。絵図の太鼓門は、移築先の専照寺の鐘楼門(写真 1)とは、かなり形状が異なるように見えるが、この点については次回検討する。物見櫓の現状(写真 10)については、これまで詳述された文献がなかったが、今回筆者は陣屋の隣の集落である川路にその所在を確認し、写真掲載の許可をいただいた。茶室として利用されていたので、改変は著しいと思われる。



写真 8: 大手樹形入口の太鼓門跡



写真 9: 樹形脇の物見櫓跡 礎石あり



写真 10: 茶室に変身した物見櫓

今回は、本題の移築された太鼓門を紹介したい。

参考文献

1. 宮坂武男 (2013) 『縄張図・断面図・鳥観図で見る信濃の山城と館 第 6 巻 諏訪・下伊那編』、戎光祥出版、pp. 542-5、
2. 松山宏 (1984) 「信濃国の守護と国人の城下」、『奈良史学』、奈良大学史学会、2 号、pp. 1-20.
2. 後藤芳孝 (1989) 「小笠原氏」、赤羽篤他編 (1989) 『長野県歴史人物大事典』、郷土出版社、pp. 138-9.
4. 飯田市編刊 (1970) 『重要文化財小笠原家住宅修理工事報告書』.
5. 「角川日本地名大辞典」編集委員会、竹内理三編 (1990) 『角川日本地名大辞典 20 長野県』、角川書店.
6. 三穂まちづくり委員会、旧小笠原家書院・資料館管理人会編刊 (発行年不明) 『写真と文字で語る国重要文化財伊豆木旧小笠原家書院・小笠原資料館』、現地で販売される解説書.
7. 上松七左衛門 (文)、三浦晃古 (画) (1876) 『小笠原氏屋敷老町三分圖』、文献 6 に掲載、現地解説板にも利用.

●特別寄稿：創業50周年を迎えて

父の建築史 3

まちなみ部会 林 茂樹

6. 県警本部会計課時代

教育庁から営繕課勤務を経て県警本部会計課に転任になり、技術者の上司が居ないので自由に働けたのか、居心地が良かったとみえて定年まで十数年間警察施設の営繕業務に携わることとなる。

日本の高度成長期と重なり警察施設も次々と建て替えられていった時代であり、仕事は忙しかったものの面白かったと思います。帰宅は遅く、残業か、無い日は飲んで帰るの毎日でした。警察署の新築が続く中で一番大きかったのは退職前に担当した徳島東警察署（現中央署）でした。新築の警察署などの基本計画は自分でっており、東署は全国警察施設の設計コンクールで金賞を受賞したのでかなり誇りに思っていました。（実施設計は剛建築事務所）

完成は1971年、今年徳島で全国高等学校総合体育大会（インターハイ）が開催されましたが、51年前のその年も開催されており、開会式に皇太子夫妻（現上皇陛下夫妻）が来県されその車列を、ほぼ完成していた東署の展望台から見学させていただいた事が思い出される。



その東警察署も2018年に名称を徳島中央警察署に改称、2021年裁判所横に移転し解体された。

7. 設計事務所開業

当時公務員の定年は55歳で、父は1972年退職し5月に八百屋町の古いビルに事務所を開設しました。正面は徳島郵便局、ビル3階に2戸住居がありその一戸を借りた事務所で設計室は畳部屋。もう一つの住戸には徳島工業高校で建築教師を勤められた四宮安太郎先生が退職後自宅を出て一人で住まわれていた。四宮先生は「徳島の地盤」という県内及び特に徳島市内の地盤調査（ボーリング調査）のデータを集めた分厚い書籍を刊行しており、建物新築の計画時にお借りしてきて敷地周辺のデータを探して粗方の地質の予測を立てられたので大助かりであった。



翌1973年私は大学卒業。しばらく東京の事務所で修行したかったのですが、忙しいのですぐ帰って欲しいとの父の要請で、佐賀県出身の同級生を連れて帰り、新人スタッフ2名で2年目が始まった。事務所もこれから順調に業績を伸ばして行けると思っていた矢先の10月、第4次中東戦争が勃発、産油国の原油価格引き上げによるオイルショックが始まった。資材の高沸による建築計画の手控えにより仕事は途絶え、新人二人は毎日建築の雑誌を眺める日々が続くという事態に落ちいった。

景気の冷え込みはしばらく続き、民間の仕事が無い中、父の古巣から少しずつ依頼が来始めたおかげで廃業すること無く仕事を続けることが出来た。父の経営の苦労も考えず、そんな中でも所員二人はお気楽に過ごしていた。徳島に帰り仕事始めてからすぐに母と妹の通う茶道のお稽古に二人で参加していました。

建築の仕事に携わるなら茶室の知識も必要だとの思いからでしたが、後の茶室の設計依頼に応えることが出来大いに役立ちました。



初釜：妹が点前、師匠・剛建築事務所のK女史、母、一人置いて私とMが並ぶ

私の初の住宅設計は「設計事務所あるある」のご多分に漏れず親族の住宅、伯父の家でした。まだ未熟で木造の納まりも十分に分かっておらず、断面までは考えましたが、矩計図は父が描いてくれました。



伯父の家（1974）

公共の仕事は父の出身の県警からの仕事が多く、駐在所から待機宿舎（共同住宅）、交通機動隊庁舎（1974）など。交通機動隊庁舎は築31年後の2005年に弊社で耐震診断を行ったが、安全が確認された。県警は耐震強度が不足していると予想し解体予定であったため、担当者からは「新築時の設計が過大設計では！」と責められたが、駐車場がピロティー状で耐震上の不安要素であったが、駐車場上部に2階の増築を想定して構造設計しており、強度が十分確保されていたためであった。現在は交通機動隊の移転後、大規模改修を経て県の「エコみらい徳島」事務局として使われている。



交通機動隊庁舎（1974）

県営繕課（当時建築課）の初仕事は池田技能専門学校の平屋校舎の2階増築で、担当者も平屋の積載荷重で設計された基礎をどう補強しようか悩んでいたところ、既設建物に荷重を掛けないように建物を門形に跨ぎ、地上からの柱で2階を支える構造を父が提案して感謝された事が思い出される。当時県立学校の木造校舎をRC造への建替えが進んでおり阿波商業高校の校舎設計を3期続けて担当した。



池田技能専門学校（1973）

その後他の市町村からの仕事も増えてきて現在に至っている。



貞光町平野小学校（1978）現在はデイサービスセンター

父は2010年に94歳で旅立った。私がまち研や建築士会の活動を続けてこられたのは父の支えがあったためです。50周年を迎え父に感謝です。

大本瑞雲郷別院「碧庵」

調査報告書(第1回)

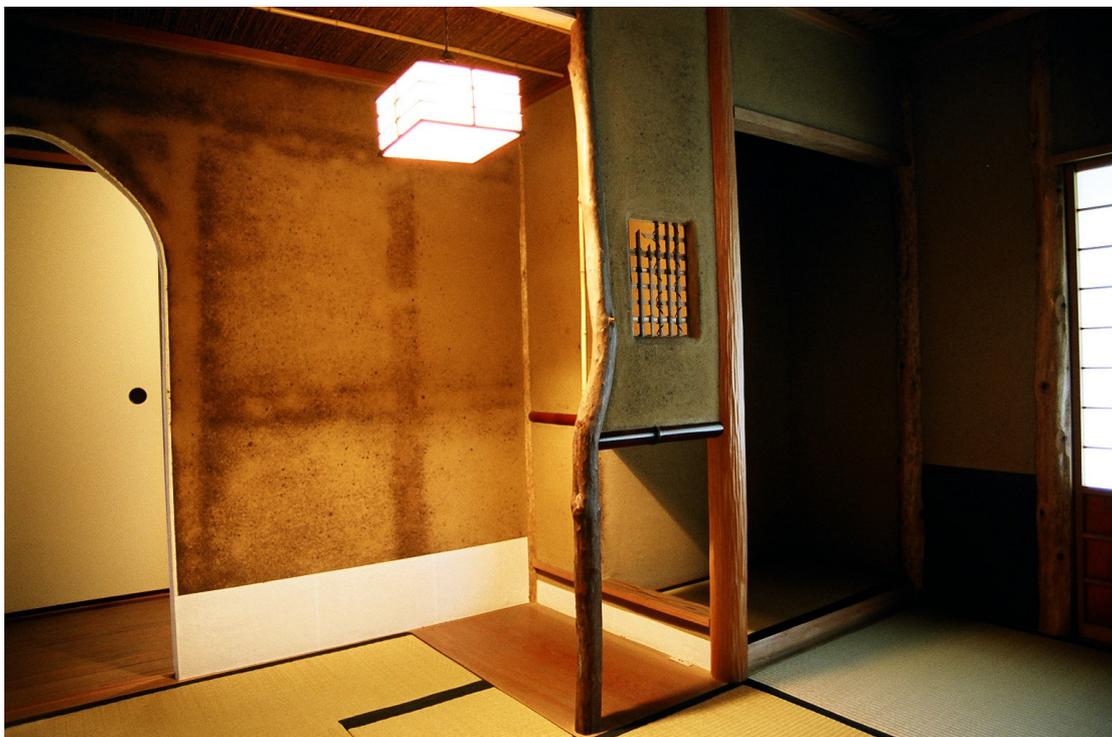
はじめに

小松島は古代から中世にかけて海が陸地化して形成されていった。四国山地東端の尾根筋が紀伊水道に沈降してゆく位置にあり、その尾根筋である日峰山や赤石山などに囲まれた浅い入り江は当時東流して小松島湾に注いでいた勝浦川や那賀川から排出される土砂で沖積されてゆき、湿原を生んでやがては陸地を形成していった。集落は弥生時代の遺跡のある中田、芝生、田野などの山地や台地に生まれた。当地が地頭や高野山、石清水八幡宮領の荘園だったこともあるが、まだこれら小集落における農耕の時代であ

った。源平合戦で義経が上陸した(1185)頃も、義経は兵を集めたという勢合から山麓沿いに源氏の赤旗を揚げた旗山を通り屋島に向かっており、当時も現在の平野部は湿地や干潟の入り組んだ原野であったものと思われる。

藩政期の17世紀に行われた阿波藩築堤工事で勝浦川河口が論田方面に固定してから、徳島に隣接するこの新天地に目が向けられ、元禄時代前後に藩の系類や他藩からの移住が見られ、神田瀬川河口に郷町が出現し、後に藍の豪商が軒を並べるようになってゆく。

この頃に藩の政策にもより新田開拓が全面的に進行する。当時海岸線は芝生、日開野まで干潟であった。金磯では元禄二年(1689)から、回船業を営んでいた多田家三代目



多田助右衛門が海岸線に度重なる風水害に見舞われるといった困難を極めながらも築堤と水門を築き、金磯119町歩と横須13町歩を干拓、金磯新田名主の地位を認められて多田家の基盤を築いた。天明六年(1786)には名字帯刀を許されている

なお、幕末の激動期に外国船の来航などに備えるため、多田宗太郎(1824~1892)は藩主蜂須賀斉裕に建白し、文久二年(1862)より1年半をかけ私財により金磯弁天山に八門の砲台、弾薬庫、兵舎、番所、射撃場等付属施設を備えた堅塁を築いて藩に献上した。砲台は徳島藩の海上防衛の要として紀淡海峡に

睨みを利かせていたが、明治二年(1869)使用されることなく廃された。しかしこの功績により宗太郎は郷士に昇進している。第二次世界大戦敗戦後、連合軍のオーストラリア部隊が進駐してきて多田家は接收され、本部に使用されていたが、壁などにはペンキが塗られてしまったそうである。

(参考文献：小松島市史他)

附近見取図





碧庵外観

事務局通信

令和4年7月の例会の報告

◇新型コロナの感染拡大により、7月の例会は中止となりました。

◇まち研だより7月号 発送作業：坂口、島田

令和4年8月例会の報告

◇7月に引き続き、新型コロナ感染症の拡大により、8月例会も中止となりました。

令和4年10月例会のご案内

◇令和4年10月21日(金) 18:30～
建築士会会議室

◇まち研だより発送作業はありません

編集部から

☆新型コロナ感染症の影響がまだまだ続いています。本当に早く以前の日常が戻ることを願ってやみません。

☆引き続き原稿を募集しています。送付は以下のアドレスまで

Mail to: m-style@mb.pikara.ne.jp

《まち研だより》2022年9月号 VOL.339号

発行日 令和4年9月16日(金)

発行 阿波のまちなみ研究会

〒770-0931 徳島市富田浜2丁目10

(公社)徳島県建築士会

TEL. 088-653-7570 FAX. 088-624-1710

代表者 坂口敏司(坂口建築設計室)

事務局 真鍋憲資(studioKEN) 088-635-4272

studioken@mc.pikara.ne.jp

編集者 島田めぐみ(M-STYLE 設計室)

谷中俊裕(阿南工業高等専門学校)